

センサー等で検知された情報と、それをもとに予測された情報を、スマホやパソコンなどで確認し、農業経営に活かす、いわゆる「ICT 機器」の活用は、肉用牛や酪農などの畜産経営にも数多く導入されています。以前ご紹介した西海市の「宍大西海ファーム」では、牛の繁殖成績向上、分娩時の事故防止、省力化などに素晴らしい成果を上げています。今回は、肉用牛や酪農における ICT 機器について、導入された農家のご意見を紹介します。

諫早市内では、肉用牛繁殖経営で「牛歩10」、「ファームノートカラー」が導入されています。「牛歩10」は牛の活動量を、「ファームノートカラー」は活動量のほか横臥や反芻の時間を検知するとともに、牛の発情適期や体調の変化を予測し、受信機（スマホ、パソコンなど）に送ることで、飼養農家に伝える情報機器です。

「ファームノートカラー」導入農場では、「発情兆候の見逃しが減少した。また、分娩兆候や疾病の恐れがある場合も通知があり、安心して他の作業に取り組める」とのことでした。

また、「牛歩10」導入農家は、スマホではなく、牛舎に取り付けた「受信盤」で72時間（3日間）の牛の活動量を知ることにより、「発情開始時間が明らかになり授精タイミングが適確になった。人工授精、受精卵移植用の採卵における授精も、導入後現在まで全て1回で済んでおり、希少価値がある精液を有効活用できている。非常に効果的な機器である。」と高く評価

されていました。

酪農経営では「U-motion」が導入されています。U-motion は複数のセンサーを用いて、6つに区分した牛の代表的な行動を検知分析することにより、発情、疾病、分娩兆候を予測するシステムとなっており、「これからの酪農にはなくてはならないツール」とのことでした。

この他にも、膣に挿入して分娩や発情の兆候を検知する「牛温恵」や、牛に飲み込ませて発情や分娩、給水状況などを胃の中から検知する「胃診電信」など、様々な機器があります。いずれの機器も、導入コスト、ランニングコストに加え、情報入力、機器脱着等の作業が必要となるため、導入する際は、経営メリットがあるかどうか、問題なく稼働させる作業ができるのかをしっかりと見極めてから導入する必要があります。



波佐見町における献穀田拔穂祭について

大村・東彼地域普及課

水稻生産の PR や稲作文化の継承に寄与するとともに、小学生等による稲作体験や地元住民の交流が促進され、地域の活性化につなげていくことを目的として、令和3年度波佐見町において献穀田の取組が行われました。町内で一番の水田地帯である岳辺田地区の「農事組合法人岳辺田」代表者楠本信夫さんを中心として、5月斎田清祓・播種祭、6月お田植祭、8月青田祭が執り行われ、10月2日に拔穂祭が盛大に開催され、10月25日には宮内庁へ献上されました。



献穀者：(農) 岳辺田、地元児童、奉賛会員



拔穂祭の様